

## 博士論文審査報告書

2013年12月20日

### 論文題目

『恋愛の近代』－近代日本における恋愛と結婚をめぐる－

### 論文提出者

文学研究科日本語日本文学専攻

洪世峨（ホンセア）

主査 専修大学文学部教授 川上隆志

副査 専修大学文学部教授 高橋龍夫

副査 専修大学文学部准教授 米村みゆき

2013年9月30日に提出された洪世峨の博士論文を、上記の3名で審査した。以下に審査内容を報告する。

本論文は、明治期に発見され誕生したと言われている「恋愛」が、近代日本においていかに語られ、議論されてきたのか、「恋愛」というフィルターを通して、日本近代の言説空間を捉えようとしたものである。

本論文の要旨は以下のとおりである。

序章では研究史を整理しながら本論文の研究目的を明らかにする。男女間のロマンティックな行為として具現される恋愛は、現代人にとっては、人生の普遍的な価値をもち、その地位は揺るがないものとなっている。そのため「恋愛」という言葉、もしくは恋愛という概念について、私たちはいつの時代でもどこでも普遍性を持っているように考えがちである。しかし、歴史を振り返ってみれば、その恋愛観や性愛観は、時代とともに多様性を持って変化してきたし、性と愛をめぐる諸価値観も、社会的・歴史的な文化現象の中で誕生した一つの思想・思潮であることがわかる。

第1章では、「恋愛」の起源を西洋古典時代からたどり、明治になっていかに日本に輸入

されたかを述べる。古代から中世を概観したうえで、現代の男女間の恋愛と結婚の源流とされる「ロマンティック・ラブ・イデオロギー」が18世紀から19世紀にかけて欧米社会に誕生した社会状況を明らかにし、それが明治時代に日本に輸入され、その後、徐々に普及し、受容されていった過程を考察する。

柳父章は、『翻訳語成立事情』で、「恋愛」は、「美」や「近代」などと同じように翻訳語であり、この翻訳語「恋愛」によって、私たちはかつて、一世紀ほど前に、「恋愛」というものを知った。つまりそれまでの日本には、「恋愛」というものはなかった」と言っている。すなわち、近代以前の日本の男女関係を「色」や「情」で表わされる肉体関係とし、明治期になって発見された精神的な男女関係を「恋愛」としている。

明治期の恋愛は、北村透谷の「恋愛は人世の秘鑰なり」という一句により発見され、明治知識人の高尚なる趣味として、神聖なる精神的な恋愛が語られた。肉体的関係を否定し、それにまつわる性欲、結婚、恋愛は切り離して考察されたのである。そうした精神と肉体の二元論に、明治期の恋愛論の限界がある。

第2章では大正期の恋愛論を扱う。前記の限界を超え、恋愛に肉体と性欲を関連づけ結婚の問題まで真正面に扱うことになるのが大正期であり、その牽引役を果たしたのが厨川白村の『近代の恋愛観』であった。“Love is best”を提唱し、恋愛に基づく結婚に意義を認めた白村の恋愛論は、大正期のデモクラシーの風とともに恋愛至上主義ブームを引き起こした。だが、恋愛を人生の最大の価値として位置付け、恋愛に基づくロマンティック・ラブにその思想の根本をおいていた白村も、恋愛と結婚の矛盾から自由にはなれなかった。彼は、当時の時代における男女間の差異と、ジェンダー的な考察に欠けていたため、理想主義としての一過性の恋愛ブームで終わってしまった。ジェンダー的考察のない恋愛と結婚の理想主義は、婦人解放どころか、かえって女性たちを抑圧する装置として使われたのである。

第3章では、白村の恋愛観に真っ向から対抗し、『青鞥』という場において女性の声を大いに上げていた新しい女たちの言説を検討する。人間として自己に生きることを自覚する『人形の家』の「ノラ」を経て、国家と家制度に管理されていた女性のセクシュアリティをめぐる問題意識を世に投げかけた彼女たちの恋愛論は、婚姻によって一生涯を権力的服従関係に置かれざるを得ない女性たちの体験に基づく切実な問題提起であった。女性たちにとって、恋愛と結婚は、男性知識人の机上の議論とは違って、妊娠、出産、ひいては育児という現実の問題が付きまとうことであったのである。

『人形の家』のノラの家出がいくら騒がれても、舞台上のノラは退場すればそれまでだったが、現実のノラたちには退場は出来ないものであった。彼女たちは、ノラの時代を超えて生きていかなければならなかった。そして、恋愛と結婚を経験した彼女たちが至ったところは母性であった。母となった彼女たちは、良妻賢母主義に対抗し家父長制の抑圧に立ち向かった時とは、全く別次元の壁に遭遇することになった。母の時代を迎えた彼女たちは、その後、到来する大正期の恋愛ブームの中では、舞台の表から遠ざかっていくこと

になるのであった。

本論文は、明治から大正期における「恋愛」の意味とその受容のされ方を検討し、ジェンダー的視点からの考察も加えた論文である。基本的な文献を的確に押さえた上で、文学作品から新聞記事まで幅広く材を採り、男女間の背景にある社会状況を読み解いている。これは近年の傑出した文学理論であるニューヒストリシズムの手法であり、それに基づく分析は時宜にかなったものとして高く評価できる。北村透谷、厨川白村、青鞥の女性たちという近代の群像を、恋愛という視点からとらえなおした叙述は新鮮で、とりわけ男女間の恋愛の果てに母性の問題を提起し、そこを近代的恋愛論の帰着と捉えたところは秀逸である。昭和になって恋愛が国家主義に絡め捕られてしまうことを暗示していよう。男女関係における女性の解放は、昭和から戦後、現代へとつながる問題であり、今後の研究の深化が望まれる。

なお、審査委員からは、長い時代を扱っているためにもう少し掘り下げてもらいたい点が散見されるところや、一次資料をもっと探索してほしいという要望もあったが、それらの点は本論文自体の価値を下げるものではなく、今後の研究への期待としたい。

以上、審査の結果、本論文は学位論文として適正かつ優秀なものであると結論する。